「それぞれのプラットフォーム」が重なる、周辺世界に開かれた「関係性の風景」

仙台の河岸段丘地形の縁から始まる青葉山エリアは、仙台城址や大学･文化施設、駅、街路･緑地公園など、多様な人それぞれの居場所･よりどころとなる「プラットフォーム」の場が島状に形成されています。このようなプラットフォームが、演者・訪問者・学生・社会人･市民･観光客など、様々な人が行き交うこの建築にも折り重なり、他のプラットフォーム同士や、狭間の空間、集合体としてのあらわれなど、スケールを横断し、遠景から近景まで、大小多様な関係性の風景が作られます。すでにある周辺の「プラットフォーム」とも等価に関係が生まれ、この建築がハブとなり、青葉山エリアの有機的な風景がより大きなうねりを作っていきます。

城址や大学など島状の「プラットフォーム」に連なる場を河岸段丘の縁につくる

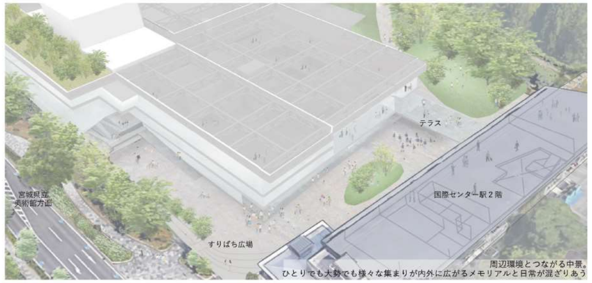
折り重なった「プラットフォーム」が周辺環境とつながる

「プラットフォーム」が、多様な主体が多様にかかわる「関係性の風景」をつくる

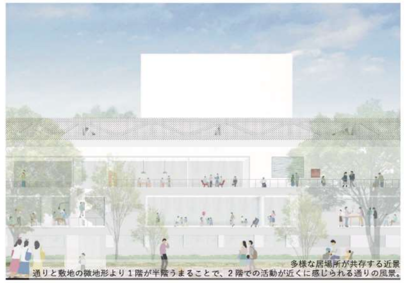
フライタワーを意図的に配置し、過剰な高さを持たないよう低く構えることで、周辺に影のない明るく開けたホワイエの様子が木々の背後に見え隠れする。青葉山エリアの広がりに応える造景。

多様な主体による関係性の網が醸成する、「リジェネラティブ・コモンズ」としての震災文化

音楽ホールと震災メモリアルが複合するこの建築で私たちが目指すのは、過去の経験や自然への畏怖を胸に刻み学びながら、人それぞれの形で、しかし共になって、他者や環境に思いを馳せ、未来の日常へと逞しく想像力を育むカルチャーの醸成です。
日常と隣り合わせにある震災、日常の延長にある創造、どちらも受け止めることは、自分と異なる主体への想像力が肝要だと考えます。個と個、個と集団、個と自然風景、個とメモリアル、といった偶然・必然ともにある多様な関係性が集合し、よりダイナミックかつ有機的に変化再生していく「コモンズ」が、ここにふさわしい震災メモリアルの風景となります。

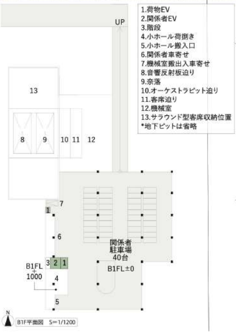


周辺環境とつながる中景。ひとりでも大勢でも様々な集まりが内外に広がるメモリアルと日常が混ざりあう



多様な居場所が共存する通りと敷地の微地形より1階が半層上がることで、2階での活動が近くに感じられる通りの風景

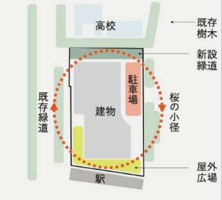
自然に囲われた緑のクワイエットスペース。／海外から学会に参加し偶然、仙台市民の展示を目にする／メモリアルの場を支える創り手の現場／街の風景と展示を重ねて見る。今ここにしかないメモリアル。／誰もが表現・創作に参加できる開かれた吹き抜けにメモリアルがつくられる／演者と観客の距離が近い一体感のあるホール。祝祭のメモリアル



B1F平面図 S=1/1200

既存樹木の配置を尊重したランドスケープ

既存樹木の配置を活かしたアクセス計画とし、東西の緑道をリング状につなぐことで敷地を超えた回遊性と歩行空間の整備を行います。杜の都･仙台の活き活きとした緑と一体となるように、地域の気候や材料に配慮したランドスケープを計画することで、この“場所らしい”風景をつくります。

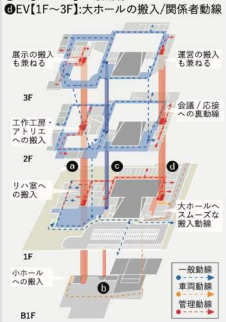


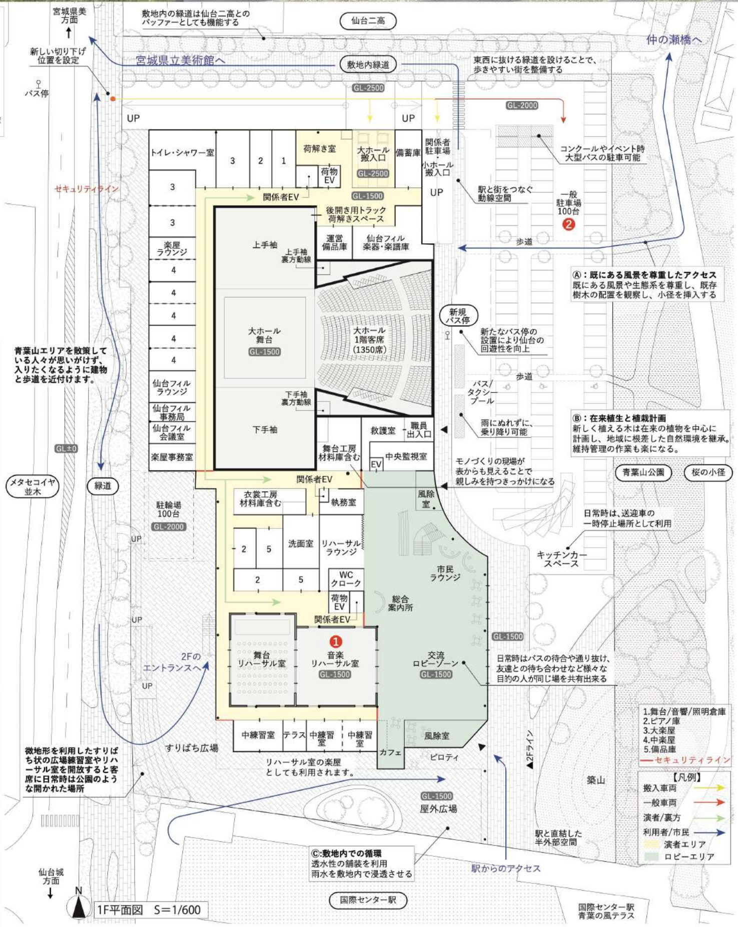
既存樹木を活かすランドスケープの具体的な工夫としてⒶ~Ⓒを平面図に示します

立体的なプラットフォームをつなぐ縦動線

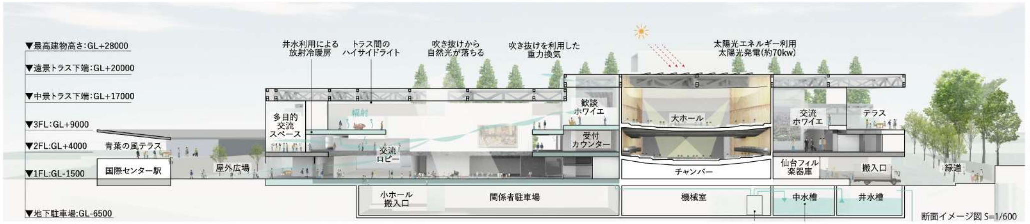
明解かつ立体的なゾーニングとすることで、セキュリティを担保しつつも異なるゾーンが接する機会を最大化します。

ⓐEV【B1F～3F】:小ホールの搬入/関係者動線
ⓑEV【B1F～1F】:関係者動線
ⓒEV【1F～3F】:一般動線
ⓓEV【1F～3F】:大ホールの搬入/関係者動線





1F平面図 S=1/600



断面イメージ図 S=1/600

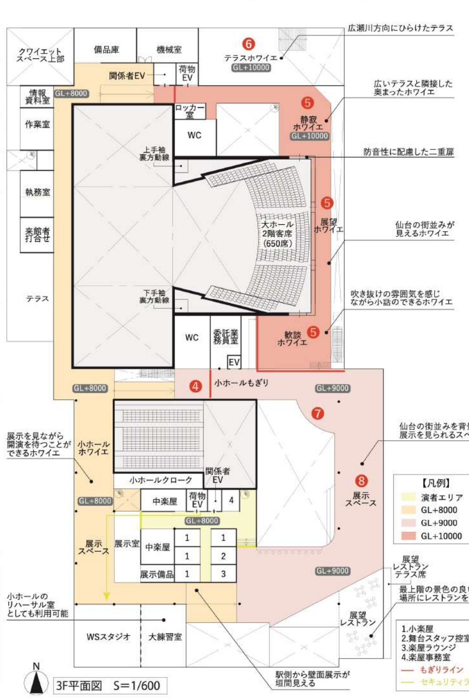
適材適所の空調・自然エネルギーの活用

プラットフォームが立体的に輻輳する空間は、ひとりから数人、大集団まで、ハレとケの様々な人の集まりや分布が想定されます。平常時の室内環境を、井水や地熱、太陽光・熱を利用し、自然エネルギーによる居住域空調で、おおらかに形成します（床・壁輻射・クールチューブ等）。快適でありながら自然の力を受け入れて生じる不均質さを許容することが大切だと考えます。イベント時などの非日常には、空気式のスポット空調で補完する計画とします。ホールなどの高機能な室は別系統とし、適材適所の空調計画とします。

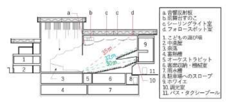
空間構成を活かす自然換気・熱負荷抑制

プラットフォーム同士の間に生まれる各所にちりばめられた吹き抜けが、自然の重力換気を促します。上部トラス構造の気積を活かし、ナイトパージや屋上緑化により熱負荷を抑制します。

2F平面図 S=1/600



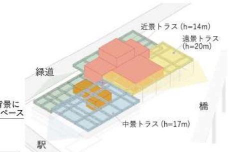
3F平面図 S=1/600



建築全体に広がるトラス屋根を活かした音響・電気設備計画

トラスの気積と二次部材の取り付けやすさを活かし、大ホール・小ホールともに適切な反射・吸音の構成が可能な計画です。またロビーなどの吹き抜け空間においても、同様の考えを敷衍することで、もうひとつのホールのような音環境の実現も可能です。音が響いたり遮断されたりの関係性を綿密に計画しながら、単独空間の快適さと空間同士のつながりとを両立させます。

風景と呼応するトラスの、おおらかな骨格



ホールなどRC壁で構成するべき箇所で耐震要素をしっかり確保しながら、平面的なトラスによりその他の箇所での水平要素を少なく効率化します。
このトラスは､敷地の周辺環境に存在する「橋」･「駅」･「道」「川」といった様々の風景を手がかり・スケールのものさしとしながら、機能・プログラムに依存しきらない大らかな骨格として作ります。一般的なホール建築の構造よりも、周辺とともにある構造体を志向し、長期的な用途の変更や使い方の変化に柔軟に対応することができます。

プロ/アマの垣根を越えプラットフォームをつかいたおす8つの工夫

①フレキシブルなゾーニング

A:大ホール・リハ室の同時利用(ex:仙台国際音楽コンクール)
B:大ホールとリハ室の別団体利用
C:リハ室と交流ロビーの一体利用
C:内外を横断する街と“つながる”フレキシブルな室配置

一体的な大きなイベント広場として利用可能

②東側に駐車場を配置

通りと建物の距離を近づけ、活動が街とつながる

南北をつなぐ動線を整備 通り抜けるだけの利用も可能

③“つながる”低い位置の2階

駐車場配置と微地形によって生まれた通りとの距離が近い2階が賑わいのあるストリートをつくります

④ホールを囲む8の字配置(2/3F共通)

多様な活動が広がる2階を歩き回れる8字の動線

大ホール利用時も、行き止まりのない動線

⑤特徴のあるホワイエ(2/3F共通)

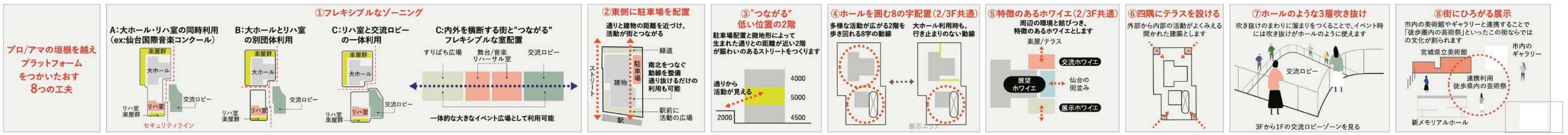
周辺の環境と結びつき、特徴のあるホワイエとします

⑥四隅にテラスを設ける

外部から内部の活動がよくみえる開かれた建築とします

⑦ホールのような3層吹き抜け

吹き抜けのまわりに溜まりをつくることで､イベント時には吹き抜けがホールのように使えます

⑧街にひろがる展示

市内の美術館やギャラリーと連携することで「徒歩圏内の芸術祭」といったこの街ならではの文化が創られます